

京都大学図書館百年

京大草創期の司書たち

廣庭基介

はじめに

筆者が京大の図書系の職場に就職したのは昭和23年(1948)のことで、その頃の図書館員の養成は、明治以来の徒弟制度そのもので、筆者は文学部図書室において、谷口寛一郎室長から欧文タイプライターの打ち方を始め、ラベル貼付の位置、蔵書印捺印のこつ、書物が天地逆に置かれているのを見ても平気な人間は図書館員ではない、などと微に入り細を穿つ指導を受けた。大正7年に京大附属図書館に就職した谷口司書の手をとり、足をとって指導したのが、これから述べる笹岡民次郎司書であった。

1. 笹岡民次郎篇(以後、個人の敬称を略し、年表記は和暦とする)

当然どこの図書館にも第一号の館員が存在する。京大では明治30年7月14日、大学創設準備の真っ最中に東京からやってきた当時26才の青年であった笹岡民次郎が第一号司書であった。笹岡司書は明治3年生まれで、小学校を出た後は上級学校へ進学することなく、いろいろの個人や私塾で、主として英語を勉強しながら、明治22年3月、満18才の時、東京図書館(後の帝国図書館)に月給12円の雇として就職した。明治27年6月に東京美術学校(今の東京芸大)文庫掛に配置転換されたが、この間にもアルバイトに当時の有名な受験ツールともなっていた『日本英学新誌』『中外英字新聞・研究余禄』の編集補助やAsiatic Society of Japanの事務に精を出した。明治29年7月には仙台の第二高等学校への配転を命じられ、9月13日には雇から書記(8級俸給与:年俸240円の判任官)への昇格が告げられた。

一方、京都に第二の帝国大学を設ける計画が公然と出たのは、明治28年12月の第9回帝国議会に創設予算案が提出された時と思われ、続いて明治29年1月14日の衆議院予算委員会において、京大が創設された場合の医科大学の設置場所が討議されたことであろう。

同じ明治29年10月29日付けで笹岡は懲戒免職

となっている。ひと月前に雇から正式の官吏への第一歩となる書記に昇任したばかりであるにもかかわらず、この仕儀である。これは筆者の全くの推測であるが、東京図書館から美術学校文庫掛の最初の掛員となり、次に第二高等学校に配転を命じられたことは、彼が洋書の整理に強かったゆえのシフトで、京大の創設がほぼ決定しそうな感触を得た彼は、仙台より京都への赴任を要請したのではなかったか、と思うのである。

彼は英語に相当の自信をもっており、第二の帝国大学でも洋書目録の需要は火を見るより明らかである所からの判断ではなかったか。そして、彼は免職から約9カ月後の明治30年7月14日付けで、「任京都帝国大学書記、8級俸給与」の辞令を手にしたのである。これより4年後の明治34年8月30日付けの文部省総務局人事課長から木下総長宛の通達によれば、閣議決定において「待遇官吏又八雇員ニシテ懲戒又八懲罰ニヨリ免職又八解雇セラレタル者ハ2年ヲ経過スルニ非サレハ官吏・待遇官吏ニハ勿論、雇員ニモ採用スルコトヲ得ス」とあるのを見ても、笹岡の免職後の措置は寛大に過ぎると見えるのであるが、当局も笹岡の図書館向きの英語力は認めていたのではなからうか。

図書館業務とは離れるが、笹岡は明治34年に『京都大学一覽』英訳の功績により、賞金60円、明治35年にも同じ英訳に賞金100円を給与されている。彼の英語力が高く評価されていたのである。図書館が開館するまでは、笹岡は事務局庶務課に席をおき、木下総長の主張である京大図書館の市民公開の意を含めた図書寄贈依頼状作成や、来るべき開館に備えて、もろもろの準備作業に大忙しの毎日であったと思われる。明治32年4月に将来、附属図書館長に補す含みで附属図書館創設事務を委嘱された島文次郎が着任するまでの1年9カ月間は、笹岡一人で頑張っていたのであった。

京大図書館員の大先輩としての笹岡のもう一

つ忘れてならない事蹟は、彼が図書館関係の協会や学会に逸早く加盟し、図書館学関係雑誌や書誌学関係雑誌に論文、訳文、評論、随筆などを寄稿したことである。最も早くは明治33年2月4日に、館長・島文次郎、同僚司書・秋間玖磨と共に関西文庫協会を創設したことである。

大正4年に『図書館雑誌』の8月号、12月号、翌年の7月号に『図書及び印刷用語(A-G)』付録16ページと、“Origins of personal names(A-E)”付録9ページを公表、以後、青年図書館員聯盟の『図書館研究』、市販の書誌学雑誌『書物礼讃』、同じく雑誌『書物の趣味』その他に執筆を続け、昭和5年に退官した後も、囑託として同11年まで附属図書館で大司書として勤務した。学歴の関係からか、司書官には昇り得なかったが、高等官待遇となり、当時のわが国の図書館界では、京大の図書館に笹岡ありと知らない人はなかったらしく、図書館学関係、英文学関係の雑誌や著書に彼の名前が出てくることがある。

笹岡が最後に住んでいたのは左京区田中里の前町74番地で、昭和16年の夏頃に亡くなったらしい。趣味は釣竿の収集、稀覯書の収集であった。

因みに、笹岡の一番の弟子は大正7年に附属図書館に就職した谷口寛一郎で、谷口は戦前に附属図書館の洋書目録掛長になり、昭和18年一旦退職、北京の華北調査研究所資料処図書館(元燕京大学図書館)主任司書に転出、引き揚げ後、京大文学部図書室主任、その間、IFEL(教育指導者講習会図書館学の部)のロバートL.ギトラー教授のクラスに、附属図書館の佐々木乾三司書と共に参加し、戦前・戦後を通じて、文部省主催の図書館専門職員講習会で洋書目録の講師を務めた。退官後、橘女子大図書課長、京大アメリカ研究センター図書室、附属図書館雑誌室でパート職員と、元気な間は一貫して図書館で働き抜いて昭和63年1月88才で他界した。

2. 湯浅吉郎(号:半月)篇

草創期の京大図書館司書として、湯浅吉郎を選ぶことには違和感をもたれる向きもあるかもしれない。島文次郎や秋間玖磨、山岡亮三郎、狩野直喜などの方が京大にとっては相応しく、湯浅は京都府立図書館長、同志社マンとして有

名ではないか、と言う意見もあると思う。しかし、島文次郎については、『静脩』の創立百年記念増刊号に書かせて頂いたので、一応済みということになった。秋間玖磨については筆者自身が今一つ調査が不足していること、山岡亮三郎は、附属図書館よりも法科大学図書室の司書として活躍しており、筆者の調査も不足。狩野直喜は文科大学創設までの腰掛け勤務であって、図書館員としてよりも、東方文化学院京都研究所(後の人文科学研究所)の初代所長、東洋学の碩学として重要な人であるため、図書館の先人とするには躊躇する、などで、ここでは短期間しか本館には勤務しなかったけれども、わが国の図書館人としては、渡米して、有名なメルビル・デューイに師事するなど、ユニークな点において、忘れられてはならない湯浅を取り上げることとした。

湯浅は安政5年、群馬県安中で味噌醤油醸造業の有田屋を経営する父・次郎吉と母・茂世の第4子に生まれた。湯浅は人間形成の上で、兄・治郎の指導と影響を深く受けたのであった。明治5年、兄は福沢諭吉に傾倒し、その全著作を読み、社会教育の必要性を痛感し、自家の前に画期的な私設図書館・便覧舎を開設した。治郎22才、吉郎14才の時のことで、私財を挙げて3,000冊の本と机、椅子、書架を揃え、一般に公開したという。新刊書、新聞、雑誌、某米国人から寄贈を受けた絵入り雑誌、和漢の古書を提供した。湯浅自身、自分が渡米して図書館学を学び、京都府立図書館長となり、日本最初期の児童室を設けたり、後に東京に移って早稲田大学図書館と関係をもったことなどは、すべてこの兄と便覧舎に胚胎している、と語っている。

吉郎は明治7年、安中の先輩・新島襄がアメリカから帰国して故郷に寄り、土産話の講演会を催した時の群衆の中にいた。以後、新島に心服し、20才にして同志社に入学、8年後の明治18年6月に卒業すると、9月にはオセアニック号に乗船してアメリカ留学に向かった。イリノイ州ノースウエスタン大学に入学して、英文学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語を修めた。明治21年になるとオハイオ州オベリン大学神学科

の全科を卒業して神学士となる。次にエール大学の博言科に入り、東洋古代語学を専修し、且つシェークスピアの劇詩を研究。明治24年6月にはエール大学においてヘブライ文学に就いての英文215ページの論文を提出してPh.Dを受けた。9月には帰国して結婚、直ちに同志社神学校教授に就任し、英文学、国文学、ヘブライ文学、旧約聖書文学を講義した。明治32年、同志社を退社して京都平安教会牧師となる。翌年から盛んに新体詩を作る一方で波多野流平家琵琶に打ち込み、免許取得。平家琵琶の形から号を半月にしたという。

明治34年7月、京都帝国大学の木下総長に招かれて、法科大学講師の地位で附属図書館に勤務し、目録と分類を担当した。すべての問題に合理的な説明を求める体質の法科大学が、どのような説明でこの人事を認めたのか、真実は不明であるが、筆者の推測を述べるならば、明治32年9月の法科大学開講に向けて、多くの教授就任予定者がドイツなどに留学して、専門書の選択・購入・発送を鋭意行った結果、この時期には京大へ送られてきた法科用洋書が山積して、附属図書館の整理能力を越えて滞貨となり、法科大学から図書館への事務進捗方の催促が続いていたので、木下総長は島館長とも相談の上、アメリカ帰りでドイツ語も修めたという湯浅を、法科大学向けの図書整理要員として招き、図書館に席を置かせて、法科大学の洋書(ドイツ書)の整理に当たらせたのではなかろうか。或いは、湯浅がヘブライ文学研究によってエール大学の博士号を取得していることに鑑み、法制史研究上に彼のヘブライ語やドイツ語の知識が役立つことを期待したのではなかろうか。明治35年2月11日、彼は祇園の平野屋で開かれた京大法科大学の親睦会(有信会の前身・法科大学会)の席上、『モーゼの法律』と題して講演を行ったことが『京都日出新聞』2月13日号に報じられている。湯浅はこの期間にも同志社女子部においてシェークスピアから国文までの講師をも勤めていた。

明治35年5月には、島図書館長らと発起して「銀峰会」を創立した。この会は「文学美術に対し趣味を有する者相集まり、毎月1回談話若し

くは講演会を開く」というものであった。

同年8月には、京都帝国大学と京都市より「海外滞在中図書館に関する事項の研究」を囑託され、再び渡米の途に上った。10月、シカゴ大学の図書館員養成学校に入学し、メルビル・デュエイから図書館学の指導を受けたアレン・ディクソンの下で6カ月学んで、その全科を修め、『日本図書館史』と題した英文の論文が好成績を得たが、『整理技術』の科目では芳しくない成績であったという。翌明治36年4月、オルバニー(ニュー・ヨーク州)の図書館学校で直接メルビル・デュエイの指導を暫時受けた後、エール大学時代の恩師で、シカゴ大学総長になっていたウィリアム・ハーバー博士の紹介状をもって、米国東部諸州の公共図書館、大学図書館、美術館、博物館を視察して廻った。5月には英国に渡り、しばらく大英博物館図書部(現在の英国図書館)においてロンドンの図書館事業を視察し、次いで6月にはパリに入り、ピブリオテーク・ナショナルとルーブル美術館を見学、同月下旬にはドイツ入りし、ベルリンの王国図書館、ライプチヒの商品陳列場などを視察した。

8月に帰国すると、10月には京都高等工芸学校(後に京都工織大)講師に就任した。そして翌・明治37年4月1日、京都府知事大森鐘一に請われて府立図書館長に就任し、同時に同志社図書館委員にも就任した。その双方の図書館向けにデュエイのDC分類を基礎とした分類表を編纂している。

明治42年には待望の府立図書館新館屋が完成したが、これは当時のわが国では最新の設備を誇るもので、特に貧困家庭(このような表現は現在では不適切極まりないが、明治末年の彼自身の言葉)の学齢前の幼児を対象とした児童閲覧室を公開したのであった。

一方、湯浅自身が著名な新体詩の作詩者であり、彼の新体詩集『十二の石塚』は現在も文学史上に明記されており、故郷・安中市にはそれを彫った石碑が建っている。また、同志社の三ツ葉のクローバーを図案化した校章は、明治26年に湯浅が国土と三位一体(智育・徳育・体

育)を象徴としてデザインしたものとされている。

湯浅自身の芸術愛好の傾向と、当時の京都に良い美術館が無かったこともあって、明治45年4月の2週間、府立図書館の3階陳列室を中心にして「白樺美術展」が開催された。主として西洋画の複製や版画を展示したものであったが、有島武郎は『白樺』の明治45年5月号に、湯浅が非常な好意をもって協力してくれたことを感謝する旨、明記している。『白樺』創刊者の一人、志賀直哉も彼の『京都通信』の中で、湯浅を始めとする館員の熱心な協力を、筆を究めて褒めている。

大正元年には正統派を自認する画家達から俗流として蔑視されていた竹久夢二の個展を図書館で開催して、同じ時期に向かいの公会堂で開かれていた文展よりも多くの観覧者を集めたという逸話が残っている。(この個展は湯浅が辞任した後の大正7年にも第2回を同館で開催している。)

大正5年、湯浅は大森知事の退任と同時に図書館長を辞任するが、同年5月5日、彼の内外の図書館事情に精通した経歴を生かすべく、早稲田大学から図書館顧問に招聘され、市島謙吉館長、毛利宮彦司書などと共に同図書館の新館建築の設計に当たったのであった。しかし、大正

7年12月に新大学令が公布されたために、計画に食い違いが生じ、計画自体が停止されてしまった。その後、坪内逍遙、市島謙吉(春城)など早稲田大学首脳の依頼を受けて、俳優図書館(別名:演劇図書館)設立準備に奔走する傍ら、海洋図書館の計画にも参画して、その調査のために三度目の渡米を果たしたのであるが、大正12年9月の関東大震災により、これらすべてが画餅に終わってしまった。この挫折の連続は湯浅の氣力を相当衰えさせたに違いない。以後、経済的にも不遇が続き、東京、大阪、また東京と、兄治郎の家や、未亡人になっていた次女の家で寄寓する生活が続いた。晩年の10年間は専ら旧約聖書の正文の訳出に励む一方、『箴言』『ヨブ記』『詩篇』『伝道之書・雅歌』『第二イザヤ』『イザヤ書』と次々に出版し続けた。昭和13年2月4日、東京中野区上高田の自宅の2階から階段を踏み外して転落したことが基で86才の図書館とヘブライ学に捧げた生涯を終わったのである。

中川正己筆『明治の文化人湯浅半月1~3』(『京都府立総合資料館だより』No.117~No.119:1998年10月~1999年4月)を参考にさせていただいた。(ひろにわ もとすけ:元附属図書館職員 現花園大学助教授)

アメリカ大学図書館の旅 ハーバード大学

附属図書館情報サービス課参考調査掛 後藤慶太

1. はじめに

私は、2000年2月27日から2週間、「平成12年度京都大学後援会助成金第1類第1種(海外派遣)」を得て、アメリカの大学図書館に研修に行く機会を与えられました。また、研修期間の後半では、日本語資料を担当している北米のライブラリアン達の研究会議に参加し、本学電子図書館について発表するという機会にも恵まれました。本稿では、最初に訪問したハーバード大学についてご紹介します。

2. ハーバード大学

<http://www.harvard.edu/>

マサチューセッツ湾大植民地圏最上級役員会の票決により1636年に新しく設立された大学は、初代の寄贈者であるJohn Harvardに因んでハーバード大学と命名されました。1638年に没したHarvardは、自分の図書室と財産の半分をこの新しい大学に残しました。以来、350年以上の歴史と伝統を誇るこの大学は、90以上の図書館を持ち、1,300万冊にのぼる膨大な資料を所蔵しています。(Harvardが寄贈した図書は1冊を残してすべて火事で焼けてしまったそうです。残りの1冊とは、ある学生がこっそり持ち出していた本でした。学生はその本をカレッジの学長に差し出しました。学長は、厚くお礼